

ひと

日露戦争時のロシア人捕虜の写真集を出版した

もうり よしひこ
藻利 佳彦 さん(59)



忘れられていく歴史を表舞台に引っぱり出し、次世代へ。そんな「つなぎ役」を自任している。

日露戦争時、日本の収容所でロシア人捕虜がどんな生活をしていたか。未発見を含む453枚の写真を取めた「ロシア人捕虜写真コレクション」を出版した。

写真は、ロシアの同盟国だった仏領事館が収集、ロシア国立映画写真資料古文書館が保存していた。

そのことを10年ほど前、たまたま知る。イラクのアブグレイブ刑務所での捕虜虐待が国際問題となっていた。「坂の上の雲」を目指していた日本は捕虜を厚遇した。当時の博愛の精神を改めて世に問いたい――。自費で幾度も通って関係をつくり、自分の勤め先の東

京ロシア語学院と、古文書館との共同出版に至った。

原点は故郷松山だ。遊び場の一つに、収容所で死んだ捕虜の墓があった。「戦争で国に帰れなくなった人たちだよ」。母にそう教えられたのを覚えている。

2008年には、逆に、ロシア北西部の村にあった収容所で没した日本人19人のため、記念碑を建てた。墓所とおぼしき場所で大量の石を掘り起こすと、「行年二十有四歳」などと記した墓石を見つけた。「捨て置けない」。こちらが5年かかった。

大学院までロシア文学を学び、今も専門学校で教える。まだまだつなぎ役は続けるつもりだ。

文・渡辺哲哉 写真・浅野哲司